

大野一雄舞踏研究所のアーカイヴについて

溝端俊夫（大野一雄舞踏研究所）

こんにちは。今ご紹介頂きました、溝端と申します。今回、こういった席で、大野一雄の追悼企画の一部ということで、大野一雄のアーカイヴについてお話する時間を頂きました。本当にありがとうございます。お話の前に、一つ自分のことをお話しします。私自身は、大野一雄さんが1977年に『ラ・アルヘンチーナ頌』という作品を初演するのですが、その時に私は二十歳くらいの学生で、特別にダンスをやっているとか、演劇をやっているとかそういうバックグラウンドの全く無い人間でした。たまたま機会があって大野一雄の『ラ・アルヘンチーナ頌』を見て、その後6年くらい経ってから、大野一雄舞踏研究所をお訪ねして以来、私自身も大野一雄の稽古にずっと参加してきました。最初に訪ねたのが1983年ですけれども、ちょうど大野一雄の世界ツアー、海外ツアーがものすごく活発化してくるのが1980年くらいからです。今日展示の中に、1980年のパリ公演のフェスティバル、また同じ年のまさに最初のヨーロッパ公演であるナンシー国際演劇祭のプログラムが展示してありますが、これが一番最初の大野一雄のパリでのフェスティバルです。その後大きなものとしては82年のアヴィニヨンのフェスティバルがあり、それから83年からイタリアですとか、イスラエル、その他のヨーロッパ、あるいは南米のツアーに出て行きます。ちょうど私はその時に稽古場を訪ねたわけですが、当時大野一雄という人は知る人ぞ知る人ではありましたが、日本ではそんなにポピュラリティは無く、稽古場といっても私を含めて常時稽古に参加しているのは3人とか4人でした。時には私と大野先生と二人っきりの稽古もあって大変恐ろしい思いをした記憶もあります。その後は、私は主として舞台公演の場合は照明のデザインなどに携わってきました。いわゆる今の劇団やダンスカンパニーは役割分担がはっきりしていますけれども、それぞれ制作がいて、舞台監督がいて、というシステムは、じつは大野一雄舞踏研究所の公演においては今もあまりないですね。まあ人がいないということもあるし、非常に緊密な人間関係の中で、ある意味家族的な中でやっていたものですから、私自身も制作もやり、舞台監督もやり、照明もやり、その前は衣裳も徹夜でやり、音響もやり、必要な事はなんでもやってきました。ある意味非常に総合的に、舞台周りのあらゆることを、日本だけでなく

世界中で体験させていただいて勉強できた。そのことは大変幸せなことだったと思います。

皆さんにアーカイヴ関連の関連年表をお配りしています。そこに、一番最初にアーカイヴ構想が始まったのが1989年と書いたと思います。1989年頃ですね。どこでそういう議論が始まったかという、実はイタリアで始まりました。大野一雄は1980年にフランスのナンシーで公演をし、その後1983年に最初のミラノ公演を行います。あとの80年代90年代の世界ツアー、主としてヨーロッパ、それから南米ですけれども、マネージメントのオフィスをずっとイタリアに置いていました。もちろんイタリア人がやっているわけですね。イタリアの、リミニというアドリア海の小さなリゾート地ですけれども、そのマリオ・ガラルディ、マリア・ガラルディという夫婦がずっとマネージメントオフィスをやっておりました。彼らから最初に、アーカイヴという言葉ではなかったですけども、いわゆる公演活動、作品制作とは違うレベルの記録を残していくといった作業をやっていたのかというふうに問われました。実はそのマリオ・ガラルディという人はイタリアのリミニでガラルディ出版という小さな出版社をずっとやっていたんですね。その時はずっといわゆるツアーで公演をやっているという状況でしたので、それも大変意義はあるけれども、その中で結局何か残っていくものはあるのかと聞かれて。私は実を言うとその時はあまりピンと来なかったんですね、その議論が。もちろん舞台のときは写真を撮ったりビデオを撮ったりということはありましたけれども、それをまた形を変えて何かにしていくというのはあまりピンと来ていませんでした。まあそういうことも確かに重要だなと思ってはいたのですが。ですから80年代から90年代にかけてはまだ、実際作業に取り掛かっていなかったです。

その次に、関連年表のほうに、「94年『睡蓮』全作品上演計画の開始」とあります。今日展示しているポスターの中でも、全作品上演計画のものを随分持ってきています。このプロジェクトはアーカイヴが出来てきたという点で重要な事業だったので少し紹介したいと思います。横浜の泉区というやや郊外にテアトルフォンテという400席くらいのきれいな劇場がありまして、当時そこがまだ開館したばかりでした。その館長の方から、大野一雄舞踏研究所が保土ヶ谷という近いと

ころにありますし、是非公演をやってくれないかというお話をいただきました。その時に、折角やるのであれば連続公演としてやらないかということになり、その中で始まったものです。断続的とはいえ、1998年くらいまで年2回3回と公演をやってきました、2000年6月『宇宙の花』という作品まで続きました。この公演をやるにあたりまして、記録を非常に重視して撮りました。もちろんいわゆる家庭用のビデオで公演の舞台を撮影するという事は、当時はある程度普通に行われていたんです。ですがこの全作品上演計画においては家庭用ではなくて、本当にプロ仕様の、実際にテレビ局で働いているようなスタッフを呼んで撮影の記録を撮りました。今はかなりテクノロジーが進化しまして、比較的質の良い画像を押さえるということが比較的lowコストで出来ますけれども、当時はそこまで簡単ではなく、多分一回の公演で大体4人くらいスタッフを呼んで、カメラマン2人とディレクターと音響さんの4人くらいのグループで、一日拘束してリハーサルから本番まで、3カメくらい撮って、大体25万から30万近くお金がかかりました。この公演自体大体4000円くらいの入場料でやっているの、それが400弱くらいの劇場ですから、経済規模で言うと、全体の10パーセント弱くらいが記録を撮るということにあてられていたわけです。毎回そういうふうな形でした。

1989年頃、最初にヨーロッパのマネージャーから「何か記録をとって形に残していくことはやっていけないのか」と言われてから5年くらい時間が経っているのですが、だんだん私たちもそういうことを意識するようになっていました。あるいは、大野一雄がこの時88歳、もう90歳くらいになるにつれてもちろん数多くの公演が出来なくなってきましたし、ソロの公演も非常に難しくなってきました。そういう中で、やはり舞踏の記録を残して将来に伝えていくというのも我々周りの人間の使命なんじゃないか、という意識が全作品上演計画の中でだんだん出来てきたのだと思います。記録をとるとするのは動画を撮るという事ももちろん重要ですが、それ以外にもポスター、写真自体も新しく撮影しているんですね当時。細江英公さんが大体写真を撮りますけれども。公演の度にポスターを制作して、そのための撮影の時間をとるということもあります。我々の公演は大体2回くらいで終わってしまいますので新聞に批評が載ることもあまりないのですが、この全作品上演計画に限って言うと、『テアトロ』とかそういう演劇系の月刊誌に批評が掲載される事もあって。こちら側から表現するというか作るものだけではなく、この公演について外部から書かれたものも比較的残ったのではないかと思います。

そういう形で我々自身も意識的にちゃんとした

記録をとって残していくという事を考え出したのが1990年代半ばくらいです。舞台だけではなく、年表にも書いてありますけれども、『稽古の言葉』という書籍も発行しました。大野一雄は、ずっと稽古の中で踊るだけでなくしゃべるんですね。そのしゃべったものを録音した記録がかなり膨大に何百時間と残ってしまっていて。それをテキストに起こして編集し、出版したのがこの書籍で、1997年に出版されました。当時稽古場でまとまった資料というのは整理されていなくて、雑多な形で資料が積みあがっていたのを、テープならテープ、写真なら写真、メモならメモとして一挙に大野一雄自身の部屋から稽古場に持ち込んで、何日もかけてある程度わかる範囲で分類して整理するというかなり荒っぽい作業ですけれども、そういったようなことが90年代の半ばくらいにあったわけです。それがいわば、我々も当時アーカイブという言葉を使っていなかったと記憶していますけれども、大野一雄のアーカイブ整理の一番初期の段階かなと思います。

今メモならメモ、写真なら写真と申しあげましたが、どういう資料があるか具体的にお話した方がいいと思います。いわばそのアーカイブに入る、インプットされる資料というのは、まず大野一雄が持っているものです。大野一雄が研究所の中、あるいは自分の部屋の中に持っているものとかにかく洗いざらい持ってきて見てみますと、一つはもちろん公演に使うものがあります。それは例えば衣裳であったり、あるいはお膳のような道具であったり、あとはたくさんのレコードとか、当時まだCDが無かったのでカセットテープとか、そういった音源の資料ですね。音の素材があります。あとは公演に使う印刷物、チラシとかポスターとか。今日も第1回の公演の1949年の公演プログラムを展示していますけれども、ああいったものが1949年以降のものについて、ほとんど、少量ではありますがすべて残っています。勿論、写真資料も膨大です。あとは映像、それから大野一雄自身が自分の勉強のために買った本ですね、蔵書資料というのがあります。それから大野一雄自身が持っているものとは違う、大野一雄について書かれた新聞・雑誌や批評記事があります。あるいはさらにまた、大野一雄に贈る、あるいは大野一雄をテーマにしてつくった美術作品やテレビ番組もありますし、最近ではアントニー&ザ・ジョンソンズというニューヨークのロックスターが大野一雄に捧げるというアルバムを出しています。そういったものもあります。

整理の過程で、ちょっと画像を見て頂きます。これは今日展示していますけれども、1949年の最初の公演のチラシですね。展示だと中を見ていただけないですが、裏側はこういうふうになってい

ます。これはもちろんデジタル化してこういう資料を作っているのですが、展示だと表紙しか見られないけれども、デジタル資料だとこのように中も見ることが出来ます。それからこれも展示してありますが、1959年『老人と海』という舞台のチラシ、舞台監督に土方巽の名前があります。



第1回大野一雄現代舞踊公演チラシ（1949）

そしてこちらにも展示してありますけれども、1980年6月に大野一雄がナンシーフェスティバルに参加したときのプログラムです。中を見てみると、これが大野一雄の公演についてのページですね。このフェスティバル、実は大野一雄だけが参加していたのではなくて、右下にあるのは田中浜さんです。彼も参加していました。これは全体のスナップで、こちらはブラジルのマクナイマというグループです。

これは『カフェ・ミュラー』ですね。ピナ・バウシュがフランスに初めて紹介された『カフェ・ミュラー』という作品を、ナンシーの劇場ではなく実際にカフェを使ってやったそうです。これは1994年全作品上演計画が始まった頃ですが、シンガポールのフェスティバルに呼ばれたときのプログラムです。

これは1999年、大野一雄の最後のヨーロッパ公演になります。ヴェニス・ゴルドーニ劇場で行われました。プレミオ・ミケランジェロ・アントニオーニと書いてありますけれども、映画監督のミケランジェロ・アントニオーニの名前を冠したミケランジェロ・アントニオーニ芸術賞というのがあります。その賞を頂いて、授賞式で踊ったのがヴェニスでの最後の公演でした。

これは逆に、1983年最初のミラノ公演のポスターです。これは新聞記事ですが、もともとのオリジナルの新聞記事はないのですが、コピーにつぐコピーで残ってしまっていて、そういうのは大事な資料なのでデジタル化して見られるようにしています。これは1959年『老人と海』の新聞記事ですね。外国の新聞記事も残っています。

これは雑誌ですが、こういったものの中も読めるようにデジタル化しています。

大野一雄さんは自身の公演については踊って動く稽古はあまりされないのですが、常に稽古するイメージ、動きのイメージをマジックでこのように言葉であったりドローイングであったりという形で書いています。こういったものも膨大にあるのですが、一部デジタル化されています。

これは1959年の『老人と海』の創作メモですが、手書きの創作ノートとして一番古く残っているのはこういったものです。こういうふうに捜真教会の週報に自分でメモ書きしているのですが、そういったものも大事に残しています。

ちょっと数値的なことを申しあげようと思いますが、一応デジタル化したものの数をベースに数えた時に大体ポスターが80点くらいあります。写真に関しては今4千数百点をデジタル化しています。ただ写真というメディア自体がコピーされてたくさん出来てしまうので、数はなかなか把握できません。手元にあるもので言えばおそらく7000点くらいあると思います。あとはチラシや公演の資料というものをクリアファイルに整理していますが、それをデジタル化した資料が、約3000点くらいあります。それと今見ていただいたような創作メモですね、これも大体5000点くらいあります。新聞や雑誌ですが、これは必ずしも全てが重要な批評というわけではないですが、国内・海外のちょっとした紹介記事を含めて数えると約1500点あります。映像に関しては、色々なフォーマットのものがありますけれども、フォーマットはさておいてタイトル数で言うと877点が今整理されていて、さらに沢山あると思うのでおそらく1000点以上あると思います。その他先ほど申しあげた衣裳、音源に関しては数が数えられないですが、衣裳については1970年代以降の公演に使ったものはすべて保管してあります。音源に関しては、全てがデジタル化してあるわけではなくオープンリールの段階のものも沢山ありますけれども、それも含めて使用されたすべてのものが残っていると書いて良いと思います。

こういったアーカイブの資料ですが、大野一雄舞踏研究所は保土ヶ谷の住宅地の中に、大野家の自宅の隣に建てられていて、ほとんどの衣裳ですとか大きな写真パネル、あるいは音源などはそこにあります。その他の写真ですとか創作メモ、紙系の資料、あるいは映像媒体の資料は、品川にある私の自宅件事務所のワンフロアに全部あります。保管の状態は普通というか、悪い状態ではないけれども、温度や湿度管理されている状態ではないので、そういう意味ではかならずしも良いとは言えない。日本は湿気が多いですから我々も気を付けてはいますけれども、やはり大切なものに関しては、今後もっと良い状態での保管を考えていかなければならないと思います。

今ざっとアーカイブにあるアイテムをご紹介しますが、これは稽古場の研究所の設計図です。この稽古場そのものが大野一雄アーカイブの、ある意味最大の資産と言っていると思います。1960年くらいに稽古場が建てられまして、大体もう築50年経っています。耐震の問題もありますし、今後放っておいた状態で何年持つかわかりませんが、私たちとしてはこの稽古場を「建物」としてはもちろん、ひとつの「場」として残して伝えていかなければと思っています。例えばかつて土方さんのアスベスト館という場所があって、それは目黒にありましたけれども、現在ではありません。色々経済的な問題もあり、人手に渡ったりして、そうすると人手に渡った段階でその価値を認められなければ違うものに建て替えられてしまうという事になりますので、大変残念ながら現在では全く何も残っていないという状況です。大野一雄舞踏研究所という場所は、土方さんもちろんここで稽古されましたし、他の舞踏家も稽古しています。大野一雄と大野慶人さんが作品を作った場所でもあり、世界中の人が1980年代90年代から現在に至るまで訪れている、ある意味で日本の舞踏の中で歴史的に価値を持つ場所だと思えます。この場所を今後何らかの形で保管できないかと思っています。何らかの形と言っても実際上、住宅地の中に建っていますので、そこを改築するとか耐震補強するとかは技術的に、あるいは建築法的にも難しいので、どこかに移築する必要があります。移築するにはもちろんお金がかかりますけれども、技術的にはそんなに難しくありません。アーカイブの場ということにも後で触れますが、それも含めて、公演で使われた物などとは規模が違いますけれども、稽古場自体をアーカイブの資産として残していきたいと強く思っています。

今日は最新映像を紹介することになっていますが、最新ではないのですが、1999年7月16日の大野一雄の稽古の映像がありますので見ていただくと思います。

今まではアーカイブの資料のインプットについてお話ししましたが、逆に今度は資料を出していくアウトプットについてお話ししたいと思います。一つ大きなものとしては、年表のほうにも書きましたが、2002年の4月にボローニャ大学に大野一雄アーカイブが出来ました。先ほど申しあげたとおり、アーカイブ議論の最初はイタリアのマネージャーからそういう話があったわけですが、これがまさに繋がっている話です。リミニはボローニャから大体電車で一時間半くらいのところであって、ボローニャ大学も出版等で近い関係にありました。ボローニャ大学には演劇音楽学科が1982年に創設されています。ボローニャ大学と話をし、非常に巨大な大学なのでなかなか話は

進まなかったのですが、最終的には2002年にアーカイブが出来ました。これがボローニャ大学です。ちょうど早稲田大学のように街と一体化している大学で、色々な校舎・キャンパスがあります。その中の一つです。ここに図書館がありまして、今この中に大野一雄のアーカイブ資料があります。ボローニャ大学にある資料は主として今日並べてあるポスターが30点くらいと、代表的な映像資料が26点ほどです。それから先ほど画像でお見せしたチラシや批評はデジタル化してデータベースになっていますが、大体23ギガくらいのデータで英文のものがすべてボローニャ大学にあります。それ以外にも美術品といえますか、細江英公さんの等身大の写真パネルが2点あります。現在ボローニャ大学は図書館の中にそういった資料が置かれていて、学生はもちろん、一般の方も開架されているものに関しては自由に見て使っていることになっています。一年に一回ボローニャ大学のダムスというところがフェスティバルといえますか、プログラムを組んでイベントを行うのですが、そのなかで時には先ほどのポスターや映像が公開されます。あるいは大野一雄、もしくは舞踏について論文を書いた若い研究者の発表があったり、外部に向けたプログラムも年一回組まれています。ただ、ボローニャ大学というところも非常に大きな官僚組織、大学なので、予算の配分によってその年何が出来るかが違ってきます。極端に言えば予算が無くなってしまうと大野一雄アーカイブをやめようという話になる可能性がないわけではないです。

日本では名古屋の愛知芸術文化センターにビデオライブラリーという開架式の映像のアーカイブが出来ています。ここで大野一雄の映像が21点公開されています。年表では2004年10月となっていますが、2003年の間違いです。

それでアーカイブのアウトプットということについては、例えば研究者の方から「資料が見たい」という問い合わせを研究所のウェブサイトを通じて頂く事がわりと頻繁にあります。それについては個別にはもちろんお答えしています。ただ本当の意味での一般公開といえますか、誰でもがいつでもそこに来て、資料を手にとって見られて、自由に使うことが出来るというレベルでの一般公開がなされているかという点、それは出来ていません。そういう公開の方法をとるにはそれなりの場とシステムがないとなかなか継続的に出来ない。個別の問い合わせにその都度答えるのはなかなか大変なもので、資料を実際に出してくるのはやっぱりある程度そこに学芸員といえますか、専門職的な人がいないと継続的には難しいと思います。将来的にももちろんそういう方向に進めていきたいと考えています。ただそれはやはり経済的な裏付

けといいますか、可能であるならば経済的な構造を作りながらやるということが理想だと思います。今例えば問い合わせがあった場合、これこれの写真、これこれの論文、という形で個別にご用意しますが、いわばボランティアで、無料でやっている状態です。そこに経済的な構造を作ることで、活動を継続し質を保ってゆく。それが理想であると思います。

それで一般公開といいますか色々なアウトプットの仕方があると思いますが、これは2007年の3月にボローニャの本当に街の中心にある考古学博物館で一ヶ月に渡って開かれたかなり大規模な展覧会の映像です。平米で言うと大体1000平米あります。今日こちらでも展示をさせていただきましたが、研究所の資産の数多くのものを持って行って展示をしました。(映像上映)



ボローニャ市立考古学博物館、
大野一雄展 会場写真 (2007)

こう言った形の大规模な展覧会は、最初横浜で2004年に行いました。続いて2007年にボローニャで、翌年にはサンパウロで行いました。サンパウロでもボローニャと同規模で行いまして、サンパウロ以外にも地方都市三都市くらいを半年ほどかけて巡回するという、非常に成功した、大きな成果のあった展覧会でした。

アーカイブに関して、このような形での展覧会開催、出版物の発行など少しずつアウトプットは出来ているのですが、今後は先ほど申しあげたような、一般的な公開が可能であるような進め方をしたいと考えております。さらにアウトプットだけでなくインプットについては、大野一雄についての資料は全部収集したい。昨年大野一雄が亡くなって非常に大きなニュースになったのですが、その後世界中から色々なコンタクトがあって、自分はこういう映像資料を持っていますとか手紙も持っていますとか、そういうメールを海外から頂いたりしました。ついこの間も1980年代にスペインから稽古場にきていた人からコンタクトがあり、今はスペインの大学の先生でいらっしゃるようですが、当時の稽古の映像をお送りくださったこともあります。そういうふうこれからあらゆる資

料が出てくるとは思いますけれども、それらを幅広くカバーしていきたいと思っています。それを尚かつ、公開していきたい。

日本では土方さんのアーカイブがあり、それから大野一雄のアーカイブがこういう形で継続していますが、世界にはダンス・アーカイブが公共のものとして結構あります。そういったところと日本のアーカイブ的な組織というものがどういう交流をしているかということとはわかりませんが、大野一雄アーカイブも日本の一つのダンス・アーカイブとして世界のダンス・アーカイブと交流が出来るようになれば素晴らしいと思います。ボローニャ大学の話をししましたが、図書館の中に資料があって見ることが出来るのも良いですが、私自身が考えるアーカイブの将来像というのは、可能であればもう少し未来的な価値を主張できるものであればと思っています。具体的にいうと資料を閲覧するだけではなく、劇場なりあるいはアートセンター的な文化施設の中にそういうものが置かれて、そこで研究をし稽古をし創作をし発表するという総合的な中での一つのある部分、求心力を持つ資料としてアーカイブが存続していったらいいのではないかと思います。大野一雄自身の資料でもありますが、そういう形でパフォーマンスアーツという一つの無形の文化財をどのように記録し、継承し、伝えていくか、ということに貢献できるのではないかと考えています。

最後にもう一つ映像をお見せします。1994年4月4日大野一雄が捜真教会という教会の教会員なんですけれども、その教会のイースターの墓前礼拝で踊る映像です。

(映像上映)

今日は6月26日ですが、1997年の6月29日が大野一雄の奥様であるチエさんの亡くなられた日です。今日は大野一雄の追悼企画ということなのですが、この踊りは大野チエさんの納骨のときにこういう形で大野一雄が踊ったものなので、今日は最後にこの映像をお見せしました。

(今回の講演内容は)アーカイブの構造ということで、私の言葉足らずで十分にお伝えできたかちょっと自信がないのですが、もし個別にデータベース自体をこの場で御覧になりたいという方がいらっしゃれば私のPCを持ってきていますので、そこでご覧いただくことも出来ます。それから今後何か資料が必要だという方もご連絡をいただければそれは提供させていただきたいと思います。アーカイブというのは、先ほど申しあげたように経済的な基盤を作りながら一般に公開していくのはなかなか難しい点もあり、私たちもこれから頑張っていこうと思っています。是非こちらにお集まりの皆様にも、ご支援ご協力いただければと思っています。以上です。